

人間福祉研究 第22号発刊にあたって

李木 明德

広島文教女子大学に人間福祉学科が開設されて24年が経ち、2024年4月には第25期の新入生を迎えることとなります。学科が設置されて四半世紀が過ぎたかと思うと感慨深いものがあります。現場の指導者となった卒業生と出会うことも増え、人間福祉学科が福祉の領域で一定の役割を果たしていることを実感するとともに、改めてその歴史に思いを馳せる機会が増えました。

人間福祉研究第22号には原著論文1編と実践報告3編、活動報告1編が納められています。いずれもが就労にかかわるテーマとなっています。松田氏の原著論文は、知的障害を伴う自閉症のある利用者への就労定着支援について、障害者総合支援法の改正にもなるとして新たに創設された「就労選択支援」の意義と問題点、求められる就労支援のあり方について論じられています。自分に合った職業を選択していくことは、就労を継続するためにも大切なこととなります。その点では、学生も同様です。実践報告のうち2編は本学科教員棚田准教授を中心に学生の就労にかかわるテーマでまとめられたものです。1編は、学生のキャリアに対する関心を早期に高めるために福祉の現場で働く専門職の話や就職が決まった先輩の話聞くことが効果的であることが報告されています。もう1編は、進路選択に影響を与える要因としてのインターンシップや実習、ボランティア、アルバイト等の実務経験の重要性が報告されています。残りの実践報告も棚田准教授を中心にまとめられたもので、2022年度廿日市市で立ち上げた「福祉・介護を元気にする会」の活動の現状

と課題が報告されています。この会は人間福祉学科を卒業し福祉の現場で働いている卒業生も参加しており、福祉・介護の仕事の魅力を自ら再確認するとともに社会に対してその価値をアピールする機会となっています。このこと自体が就労を続けていくために大切な機会となっているのではないかと推察します。

今年度の人間福祉学会は、福祉の実習を依頼している施設や機関で実習指導者としても活躍している卒業生に登壇してもらい、実習指導という視点から学生を育てるために必要なことは何かということについて、各自の経験を交えながら話をさせていただきました。詳細については人間福祉学会活動報告の中に掲載しておりますので、目を通していただけたら幸いです。

人間福祉学会は、学びの場であると共に、「文教だからこそ」の援助観やつながりを確認し、形にする場となっています。この会を中心に、これからもさらに多くの学びやつながりを提供していくことができたらと考えています。その中で学生は、この会を通して福祉の現場で働くことの意味ややりがいについて考えるきっかけとなるようにと願っています。また、卒業生の皆様にとっては卒業後の学びの場として、さらに在学生に向けて多くの学びを授けていただく機会として、また在学生が卒業後の自分の姿を描くためのモデルとして、ぜひ人間福祉学会に参加していただけたらと願っています。

皆様におかれましては、今後ともご支援賜りますようよろしくお願いいたします。